

週 報

こひつじ

第41巻 41号
 大津キリスト教会
 菊池郡大津町室 119
 TEL 096-293-4470
 FAX 096-293-4961
 牧師 米村 英二

バプテスマのヨハネの最後

イエスについてこの話がユダヤ全土と回りの地方一帯に広まった。さて、ヨハネの弟子たちは、これらのことをすべてヨハネに報告した。すると、ヨハネは、弟子の中からふたりを呼び寄せて、主のもとに送り、「おいでになるはずの方は、あなたですか。それとも、私たちはほかの方を待つべきでしょうか。」と言わせた。(ルカ七の一七―一九)

その一 ついてゆくべき人はだれか

バプテスマのヨハネは獄中で考えた。やがて自分はここで死を迎え、この「これからの人」のために何えるだろう。その前に、弟子たちができるかと考えることである。のためにやっておくべきことはいか。

そのときイエスのうわさを聞いた。

イエスとは、彼が、「見よ。世の罪を取り除く神の小羊」と呼んで、世に紹介した、その人だ。

そこでヨハネはふたりの弟子をイエスのもとに遣わした。彼らがじかに会って、イエスがどんな方

かを知るためだった。

こうしてエリヤは、「これからの

人」エリヤに、自分の持っているものすべてを、いや、その二倍を残して去ったのである。

ソロモンは次の世代の人にこう言った。

「結局のところ、もうすべてが聞かされていることだ。神を恐れよ。神の命令を守れ。これが人間にとつてすべてである」

パウロも最愛の弟子テモテに次の言葉を残して去った。

「けれどもあなたは、学んで確信したところにとどまっていなさい。あなたは自分が、どの人たちからそれを学んだかを知っているのだから」

新島譲の弟子たちも、最後の言葉を書き残した。すると彼は言った。

「私の死後、記念碑を建てないでほしい。一本の木の柱に『新島襄の墓』と書けば十分である」

また言った。

「生徒は鄭重に取り扱うべきである。独立心旺盛で制御に服さない学生がいても、これを圧迫することなく、できるだけその本性に従って彼を導き、天下の人物を養成

してもらいたい」

死を前にして、次の世代に何を語り、何を残すかは、だれにとつても重要なことだろう。

ではバプテスマのヨハネは最後に何をやったか。弟子たちをイエスのもとに遣わし、こう問わせた。「おいでになるはずの方は、あなたですか。それとも、私たちはほかの方を待つべきでしょうか」

弟子たちが身近にイエスと接し、この方以外に、ついてゆく人はいないとわかるためだった。

考えてみると、バプテスマのヨハネが弟子たちに問わせた問いは、人生において重要なものではないのではないか。

その意図するところは、「ついてゆくべき人はだれか」である。

人生はだれと出会い、だれについてゆくかで決まると言っている。子どもの教育で問われているのもそのことだ。

そこで私は、彼らが小さい頃、本はみな私が選び、それらを毎晩寝る前に読んでやった。できるだけ美しいもの、尊いものにふれることを願ったからだ。

三木清は、何を読むべきかについて、こんなことを言っている。

「ひととはただ善いものを読むことによって、善いものと悪いものを見分ける眼を養うことができるのであって、その逆ではない」と。

読書は子どもたちの心に美しいものへの憧れを与えてくれただろう。が、私が最終的に願ったのは、

彼らがイエスの言葉にふれ、イエスに感銘を受け、自分の人生において、ついてゆくべき方はイエスよりほかにないとわかってくれることだった。

ヨハネが弟子たちに望んだのも、そのことだったに違いない。

自分の子どもたちや若い次の時代の人たちにイエスを紹介することほど、有益な働きがあるだろうか。(続)

ヨハネが弟子たちに望んだのも、そのことだったに違いない。

自分の子どもたちや若い次の時代の人たちにイエスを紹介することほど、有益な働きがあるだろうか。(続)

ヨハネが弟子たちに望んだのも、そのことだったに違いない。

自分の子どもたちや若い次の時代の人たちにイエスを紹介することほど、有益な働きがあるだろうか。(続)

ヨハネが弟子たちに望んだのも、そのことだったに違いない。

自分の子どもたちや若い次の時代の人たちにイエスを紹介することほど、有益な働きがあるだろうか。(続)

ヨハネが弟子たちに望んだのも、そのことだったに違いない。

次週（一〇月二六日）の礼拝

○礼拝、教会学校はともに午前

一〇時半から。

○説教は西岡潤也さん。

○司会は合志文利さん。

○説教は前回に続き、ルカ八章

の「種蒔きのたとえ」からでした。

みことばが心に入ってゆくには、

いくつかのことが求められます。

第一、心がやわらかいこと。

第二、深さが求められること。

第三、限られた土地の養分を分散させないで、一つに集中すること。

以上のようなことを語りました。

○礼拝参加者は七十七名（男二五、女五二）、それに子どもが三名、合わせて八〇名でした。

自由にお取りください。今回の「あの人インタビュー」は野口訓子さん。「編集室から」は西岡潤也さん。

幸子さんのアメリカ旅行

幸子さんは一三日（月）午後

アメリカからぶじ帰ってきました。

よい旅だったようです。

一緒に旅をした長女真紀からの手紙の一部。

「ママは後半ちよつと疲れ気味でしたが、病気になることもなく弾丸ツアーを乗り切りました。すごいと思います。空港では、行きも帰りも、『車椅子がいりますか』と聞かれましたが、その必要もなく、あの大きなスーツケースを抱えて旅するママの気力には驚きました。

帰るとすぐにブレントさん（国際交流員として長く大津に滞在。姉妹都市締結に貢献し、現在はアメリカで弁護士として活躍）から電話があり、『君のママ（幸子）を連れてきてくれてありがとう。昔に戻ったみたいだった』と感激していました。ブレントさんは、日本滞在中の一〇年間は、ママとパ

パに助けられたと感謝しています。心を開いて話せる人がほかにいなかったようです」

ある方から本の注文があり、お送りすると、次のような感謝の手紙と献金が届けられました。

「送られてきた『イエスの処方箋』を、さっそく読ませていただき、感動を新たにしているところです。実は、親しい友人から、先生の本を何冊かいただいて、すでに『幸福論』や『旅人』は読ませていただきました。今回の『イエスの処方箋』は、現実の生活におけるさまざまな疑問、課題にわかりやすくお答えいただいて、大きな励みと励ましを受けております」（神奈川県鎌倉市在住）

本がお役に立っていることは感謝です。

牧師のメールアドレス

yonemura@ja2.so-net.ne.jp